派遣中学生作文（平成29年度）

平和のバトン

網走市立第二中学校3年
濟木（さいき） あかね

青い空、きれいな海、白い砂浜。網走よりもずっと暖かくて、みんなニコニコしている――。これが、私の「オキナワ」の第一印象です。

私は、7月25日から3泊4日の日程で、網走の友好都市である沖縄県糸満市を訪問しました。初めての沖縄、初めて行動を共にする仲間たち。たくさんの初めてに囲まれて、私は少し浮かれた気分で沖縄の地に足をつけました。

初日は、首里城を見学し、実際に糸満の中学生の人とも交流しました。首里城は想像していた以上にきれいで、中学生の人もニコニコ笑って私たちを歓迎してくれ、私はこの地で本当に激しい戦争が起こっていたことが信じられなくなりました。

2日目、私たちは久保田さんという方に戦争のお話を聞きました。そこで聞いた「オキナワ」は、今の様子からは想像もできないくらい悲惨なものでした。辺りにはたくさんの死体。その上に、一人、また一人と重なってゆく。人が亡くなっても何も感じない、人が人でなくなってしまう場所。「生き地獄」。この言葉がぴたりと当てはまるようでした。ただ、聞いているだけなのに、これほどにもつらい戦争。それを知る久保田さんは話しながら何を思っていたのでしょうか。私には、とても想像できません。

午後からは、ひめゆり平和祈念資料館や平和祈念公園内の資料館などを訪れました。資料館内には、戦争に参加された方の遺品がたくさん展示されていて、戦争とは実際にあったことなんだ、という実感が遅れてやってきました。その中には、日本兵だけでなく、女性や子ども、お年寄りなど大勢の方が戦争によって亡くなっている写真もありました。その写真を見た時、私は鳥肌が立つのを止められませんでした。いやだ、見たくない、気持ち悪い――。たくさんの感情が沸き上がってきて、私は足早にそこから離れました。『人が死んでも何も感じない。人が人でなくなってしまう場所だった。』久保田さんの真剣な声が、やけに大きく私の頭に響きました。初日の浮かれた私の姿などもうどこにもなく、ただその自分を恥ずかしいと思う自分だけがいました。――これが、戦争。傷つけ合う、ってことなんだ。

この旅で学んだ「戦争」とは、今までに私が学校で習った「戦争」とは全く違うものでした。たくさんの人が死におびえ、そしてたおれていくことが当たり前の世界。「戦争」。ただの二文字から、このようなことを私たちの誰が想像できたでしょうか。

今まで私は、戦争に対して真剣に向き合ってきていませんでした。今回の旅で学んだ戦争は、あまりに悲惨で、なぜ自分は今までこんなに大切なことを知ろうとしなかったのだろう、と思いました。しかし、過去を悔やんでも何も始まりません。かつての人々がそうであったように、前をきちんと向き、今の沖縄、今の日本、今の世界を見つめ、もう二度と悲惨な過去が起こらないよう、たくさんの人たちに伝えてゆけば、いつか必ず戦争という言葉がない世界をつくれるのではないでしょうか。そのためにも、今を担っていく私が、つらい過去の事に目を背けることなく、向き合い、考え、伝えていこうと思います。

今、日本をつくり上げている日本国憲法の中には、「平和主義」が掲げられています。戦後72年、一度もその平和が揺らいだことはありません。これは、日本が世界に誇れることです。しかし、その「誇り」はいつか必ず当たり前となる日がやってきます。なぜなら、私たちが伝えてゆくからです。私たちの手には、先人から受け継いだ可能性と、私たちの想いという「平和のバトン」があるのだから。

派遣中学生作文（平成29年度）

戦争の悲惨さ

網走市立呼人中学校2年
相田（あいだ） 彩（あや） 光（みつ）

私は7月25日から7月28日まで平和都市友好交流事業に参加してきました。そこで私は沖縄戦について学んできました。その中で心に残っている事は糸満市教育委員会教育委員長の久保田暁さんのお話とガマ・平和祈念公園・ひめゆりの塔でのことです。

糸満市教育委員会教育委員長の久保田暁さんのお話では、戦争当時、久保田さん一家は祖父・祖母・母・母の背中に背負われた2歳の兄・母の手で抱かれていた0歳の久保田さんで行動していました。ガマを見つけ入れさせてもらおうとすると、「赤ちゃんが泣いてアメリカ軍に見つかる」と追い払われたそうです。そこで久保田さんの母は「息子2人が居たからなんとか生き延びたい」と思い、息子2人を殺すことはなかったそうです。ですがたいての母親たちは、赤ちゃんを池に投げ捨てたり、赤ちゃんの首を絞めたりしてしまうそうです。久保田さん一家はガマに入れなかったので、お墓の中で2カ月間身を隠し暮らしたそうです。暮らしていたある日、近くに爆弾が落ちました。爆音が収まり久保田さん一家が立ち上がりみんな生きていることを喜んでいると、祖父が母の背中に背負われていた兄が亡くなっていることに気付いたそうです。兄は爆弾の破片が刺さっていて即死していたそうです。母は息子の死に心から悲しむも「兄がいたから母と久保田さんが助かった」「家族を守ってくれてありがとう」と感謝したそうです。

また、実際に見学した自然洞窟のガマは真っ暗で狭くゴツゴツしていました。ここは避難場所として使われていたそうです。ガマにいることがアメリカ軍に見つかると「デテキナサイ、デテキナサイ」と言われ、出ていかないと手りゅう弾を入れられ一人また一人と息絶えたそうです。

久保田さんのお話では、戦争の悲惨さ「戦争は人が人でなくなる」・命の尊さ・平和の大切さ・世界恒久平和（永久に平和な状態）について学びました。私は「戦争は人が人でなくなる」という言葉がとても心に響きました。そしてこの言葉を心に刻もうと思いました。

また、ひめゆりの塔は「沖縄戦」で亡くなった学徒隊の一人一人の写真が貼られてありました。それを見て私は心が痛みました。罪の無い人たちが戦争によって命を落としていくのはどれだけ残酷なことか実感したからです。「ひめゆり学徒隊」は沖縄で動員された「看護補助要員」であるとされていました。ひめゆり学徒隊の解散命令が出た日、教頭先生から、「必ず生き延びなさい。そして、後世へこのことを伝えなさい。」と言われたそうです。しかし、学徒たちが解散した直後、米軍が襲ってきたため、「ドンッ」という破裂音とともに、事前に軍から渡されていた手りゅう弾で、「集団自決」をしたそうです。私はこの状況を思い浮かべるとさらに心が痛みました。こんなにたくさんの命を落としている戦争は、二度と繰り返してはいけないと感じました。

今回、平和都市友好交流事業に参加して私は、戦争は久保田さんがおっしゃっていたとおり「戦争は人が人でなくなる」と思いました。そして、誰かが何かを得することもない、悲惨なものだと思いました。

最後に、糸満市を訪問して北海道と沖縄の違いを感じることができました。たくさんの思い出もできました。特に、海が透き通っていてきれいだったこと、沖縄名物のサーターアンダーギーがおいしかったこと、糸満の中学生との交流などが良い思い出となりました。そして、このような経験を与えてくださり、本当にありがとうございました。

派遣中学生作文（平成29年度）

青少年平和友好交流事業に参加して

網走市立第五中学校1年
谷口（たにぐち） 愛衣（めい）

私は、「青少年平和友好交流事業」に参加し、日本で唯一地上戦になった沖縄へ行ってきました。

1日目には首里城見学、願寿館の歓迎会に行きました。首里城見学では、お父さんの話を聞く限り、とても暗いイメージでした。でも、実際に行ってみると、とても豪華でびっくりしました。願寿館の歓迎会では、人参しりしりやパッションフルーツ、パイン、マンゴーなどを食べました。エイサーの体験もさせてもらって、とても楽しかったです。

2日目には市長表敬訪問、体験講話、戦地見学、平和祈念公園などの見学、サーターアンダーギー作りをしました。体験講話では、久保田さんにお話していただきました。久保田さんは、お母さんに抱っこされ、お兄さんはお母さんの背中にいて、久保田さんは無事でしたが、お兄さんは破片に当たり息を引き取ってしまったそうです。話を聞いていて戦争のつらさが伝わりました。戦地見学では、轟豪に行きました。すごく暗い所で、懐中電灯を消すと目を見開いても何も見えなかったので、小さい子どもが泣いてしまう気持ちがわかる気がしました。平和祈念公園やひめゆりの塔の見学では、あの戦争でこんなに人が亡くなってしまったんだと心を奪われました。説明員さんの学徒の方の話や、リアルな写真、しっかり見られませんでしたが、言葉を失ってしまいました。

3日目には、美ら海水族館、美々ビーチに行きました。美ら海水族館では、いろいろな生き物がいて面白かったです。そして、巨大な水槽も迫力がすごくありました。美々ビーチでは、バナナボートに乗ったり、サバニという船に乗ったりしました。バナナボートは、すごく速くて海に落ちそうになりました。サバニは、こぐのがすごく大変でしたが、みんなで協力してできて良かったです。

4日目には琉球ガラス村、道の駅いとまんに行きました。琉球ガラス村では、フォトフレーム作りをしました。ガラスのかけらでオリジナルの物が作れて良かったです。道の駅いとまんでは、網走では買えないような物がたくさん売っていました。見たことのない物も売っていて、すごく面白かったです。

今回の交流事業を通して沖縄で学んだことは、沖縄戦の悲惨さです。沖縄戦は、すごく残酷だったと思います。軍隊だけではなく、住民まで巻き込みました。戦跡や資料館などがあるのは、多くの人に知ってほしいからだと思います。なので、私も今回学んだことを周りの人に伝えていければ良いと思います。

今回の交流事業に行ってたくさん友達もできて、沖縄戦のことを改めてしっかり学べて本当に良かったです。これからは、このことを自分なりにしっかり考えて周りの人に伝えていきたいです。

派遣中学生作文（平成29年度）

72年前の悲劇

網走市立第三中学校3年
小原（おばら） 佑太（ゆうた）

僕は、7月25日から28日までの4日間、市内の中学生3名と、友好都市である神奈川県厚木市の中学生4名と共に、72年前の戦争で、最後の激戦地となった糸満市を訪問してきました。

今回、僕たちは、実際に沖縄戦を体験した糸満市教育委員会の久保田暁さんの戦争体験講話を聞くことができました。久保田さんは当時まだ0歳で、お母さん、兄、祖父、祖母と一緒に、3ヶ月間も降り注ぐ銃弾のなかを逃げていたそうです。久保田さんたちが避難するため、ガマに入ろうとすると、日本兵に赤ちゃんが泣いたら見つかってしまうという理由で、中に入れてもらえなかったそうです。他のガマでも同じで、泣いてしまった子は外に連れていかれて日本兵に殺されたり、時には、泣かないようにと口を強く押さえ過ぎてしまい、母親が、自分の子を殺してしまうこともあったそうです。僕たちが訪れた轟壕でも、実際に、まだ幼い5歳の子が、日本兵に殺されたと聞きました。行く場所を失った久保田さんたちは、岩影に隠れながら逃げていたそうです。そうしたある日、久保田さんたちの近くに爆弾が落ち、たくさんの爆弾の破片や、人の体の一部などが降ってきたそうです。この爆弾で、まだ2歳半だった久保田さんのお兄さんが亡くなられたそうです。そこから、行き場のない久保田さんたちは、お兄さんをその場に残し、最終的に2カ月間過ごすことになったのは、苗字ごとに埋葬されている大きなお墓でした。もちろん中にはお骨があり、手を合わせてから、中で暮らしていたそうです。しかし、隠れる場所があっても、困るのは食料です。久保田さんたちは、焼けて真っ黒になったサトウキビや、砂まみれの米、そして、死体が浮いている井戸から汲んだ腐った水を飲んで過ごしていたそうです。

僕は、久保田さんのお話を聞くなかで、強く心に残った言葉が、3つあります。1つ目は、「戦争は、人を人じゃなくする」で、死体の上を歩いたり、生きるために人を殺すのは、とても怖いと思ったからです。2つ目は、「生きている自分たちが平和をつくっていく」です。これは、72年前のような悲劇を起こさないために、とても重要な言葉だと感じました。3つ目が、沖縄の白銀堂という場所には、「意地ぬ、出らぁ、手引き、手ぬ、出らぁ、意地引き」という言葉が伝えられています。これは、「腹が立ったら手を引け、手が出そうになったら心落ち着け」という意味で、戦争を起こさないためには、この言葉が大切だと思いました。

久保田さんの話を聞いた後、僕たちは、戦時中、千人以上の人が暮らしていた轟壕を訪れました。中は、全長百メートルほどですが、足場が悪く、落石でふさがれて先に行けない所もあり、当時、どれほどつらい生活を送ってきたのかが分かる、とても貴重な体験ができました。

その次に訪れたのが、有名なひめゆりの塔です。ここには、戦争で亡くなった方の遺品や、日記、体験談などが数多く残されており、その中でも、自分と同じ年齢の人がたくさん亡くなっていたので、とても心が痛くなりました。

平和学習の最後に訪れたのが、平和祈念公園です。ここは、戦争中、空爆によって焼け野原になり、たくさんの人が亡くなった、摩文仁の丘（まぶにのおか）という場所に建ち、戦死した方の名前が、各都道府県別に刻まれ、また、敵だったアメリカ兵の名前も刻まれています。久保田さんの家族の名前も、この中にあるそうです。

今回、平和都市友好交流事業に参加し、戦争を体験した方のお話を直接聞いたり、実際に人がたくさん亡くなった場所に行くことができ、普段感じることができないことを体験することができました。今後も、学び、感じた事を戦争を知らない人たちに、もっと広め、二度と、72年前のような悲劇を起こしてはならないと、さまざまな機会の中で、伝えていきたいと思っています。